

# 紀州藩付家老・新宮水野家の裔

新井 宏

東京工業大学入学時（一九五六年）から卒業時までの四年間、ほとんど一般授業には出席せず、月一回発行する『工業大学新聞』のため本館二階正面の一等地にある「新聞部室」に詰めていた。各学年の部員は多くても五名以内、四年生になると卒論や就職活動のため実働部員は常に十名もいなかった。その上、新聞発行の資金稼ぎのため、企業広告を集める仕事に二〜三割の人手を割かざるを得なかった。

企業広告などと言うと格好が良いが、大部分は卒業生が社長等を務める会社の総務部や秘書課を回って、寄付広告を募るのが任務で、総会屋のような仕事であった。そのため、広告掲載料の二〜三割を部員にキックバックしていたが、地方出身の部員にとってはささやかなバイト代にはなっていた。

状況が変わったのは一九五八年末頃から始まった「岩

戸景気」である。各企業が競って求人広告を出し始めたのである。それまでは大岡山近辺の商店街にチマチマ協力を依頼していた広告が、あつと言う間に無くなり、「記事中」から「二段組」、そして遂には全面広告専用頁を作り、一面に「四段組半裁」を八件載せる状況に至った。それまで秘書課に行つてなんとか協力を依頼していたのが、黙っていても先方から広告原稿が入ってくる。そのバイト代で海外旅行に出かける部員もでる始末。

これは工科系大学だけではなく、東大新聞でも後にリクルートを作る「江副浩正」を生みだしていた。そんな時代のピークである一九六〇年に就職活動をした筆者ではあるが、一般学生とは若干異なったハンデがあった。

ひとつは「新聞部」の活動である。その頃はまだ「全学連」が過激化する前であったが、筆者の高校友人で東

大経済学部に進んだ青木昌彦が姫岡玲治の筆名で書いた「民主主義的言辞による資本主義への忠勤・国家独占資本主義段階における改良主義批判」によってブント（共産主義者同盟）の理論的支柱となっていた。

「砂川闘争」などに参加すると「姫岡」の友人と言うだけで特別視された。もしかしたら、大手企業から全学連の活動家とみなされ、入り口で閉め出されるかも知れないとの不安もあった。青木昌彦は「姫岡論文」を書いて東大始まって以来の秀才と言われたこともあるが、その後学生運動から離脱、近代経済学に転じ日本経済のバブル期にノーベル経済学賞の候補にもなった人物である。それに大企業は筆者の体質に合わないようにも感じていた。それは就職活動前の夏休みに大阪の「松下電器工業」で実習した経験である。松下電器は大企業ではあるが、「松下商店」の古い体質や風習を宿しているようで馴染めなかった。実際は寮生活の味気なさに馴染めなかっただけなのかも知れないが。

そんな環境で、自宅から通える中企業を三社ほど選んで、企業訪問を開始した。

まず、手始めに訪問したのが日本金属工業というステンレス鋼の会社である。資本金は十二億円、主力工場は一万三千坪ほどの川崎工場で、横浜工場を合わせても総従業員は千名ほどで、町工場の様相であったが、既に相模原市の橋本駅周辺に八万坪の用地を確保して、大拡張

を計画していた。

本社は有楽町駅前にあった。覚えているのは、温和な紳士、水野誠さんが面接をしてくれたことである。後に知ったが日本金属工業では役員序列で宮代社長に次ぐ二番目の技術系トップ常務取締役であった。なにを話したか全く覚えていないが、企業にも学生に対して、こんなにも紳士的な対応をする方がいるのかというのが印象であった。

簡単な面接が終わると、総務担当が川崎大師線の「産業道路」にある川崎工場に行つて欲しいという。とにかく指示にしたがつて工場にたどり着くと、試験問題を準備した技術者が待っていて、まずは工場見学、そして数学や物理、化学と英語のテストがあった。当方としては、まだ受検を決めたわけではなかったが、成り行きでとにかく指示にしたがつた。

幸い、高校で得意だった数学、物理、化学はかなりの出来であったと思うが、金属特有の英語のテクニカルターム等は、良くわからなかった。

日程を終えて川崎駅に出て、軽くビールを飲んで家にかえると「合格」電報がきていた。当初の計画では数社を検討の上、決めるつもりであったが、「まあ、いいか」ということになってしまったのが、その後の日金工との四十年にも及ぶ縁である。

同期入社は相模原工場大拡張のため、技術系だけでも

大卒十五名以上、配属は試験研究課というところであった。とりあえずの仕事は、工場で放射性物質のコバルト60を用いた非破壊検査装置の導入が決まっていた、その放射線取扱主任者の資格を取ることであった。

サボってばかりいたとは言え、一応原子核物理を専攻していたので、資格取得はそれほど難しくなかったが、もうひとりの新入社員は合格できなかったらしく、半年ほどで退社してしまった。

試験研究課は品質管理の部門でもあり、これも趣味としていた「統計学」が役立ち、新入社員としての成績は上々であったので翌年には研究部に配属された。

当時の研究部はおかしな組織で、研究部長の須永寿雄の他に、後に社長となる相模原工場長の塚本富士雄や企画部次長の中島が兼務で在籍していた。

会社として幹部技術者は博士号を持つべきとの方針が出されていて、対象者には若手の研究員を数名ずつ付け博士号取得のための専属チームが作られていた。

これは日本の大学制度が大変革して、従来の功成り名遂げた研究者や技術者がその業績を博士論文に仕立てて、博士号を取得するドイツ式の「論文博士」が廃止され、学部卒業後、修士課程や博士課程で研究を続けて、博士級の能力を身につけた研究者に「新制博士」としての能力を証明する米国式に移行することであった。

経過期間があるとしても、数年で「論文博士」を取得

しなければ、博士にはなれない。

そのなかで常務の水野誠さんは、ステンレス業界きつての大学教授級の学者であり「功成り名遂げた」学者に相当し、何か論文さえ書けば「論文博士」となれる人物であった。

そのため特別なチームの補佐はなかった。そんな雰囲気であったが、通常は本社にいて、何を論文に仕立てるにしても、直属のスタッフは付いていない。そのため、工場にきて研究部の耐食性研究者に指示しながら、論文を書き始めたが、まとめ役がない。

その中で、JISに規定された「5%硫酸腐食試験」で奇妙な現象が出ていることが話題になっていった。腐食試験結果の数値が2つの山に分離するのである。しかもその分離現象には再現性が乏しく、そもそも不動態領域で使用するステンレス鋼を活性態領域で試験するのに疑問があった。

試験で耐食性の良かったサンプルと一緒に耐食性が劣ったサンプルをいれると耐食性が良く出る。どうやら、腐食試験溶液に何か微量の成分が溶け込むと、試験結果が良くでるらしい。それは錫のようだ。事実、腐食液にごく微量の錫を添加すると腐食を抑制する効果がある。

JISの試験法にそんな欠陥があることを正面切って主張するのは問題があるが、マイルドな表現で論文に書き込む。そんなことは「新聞部」でしばしば経験してい

た。嘘にはならない程度に表現を抑えて、論文としての筋は通す。

腐食の権威者である水野さんにはそれがすぐに判った。水野さんが工場に見える度に役員応接室に呼ばれるようになった。特命チームではないが、結果的に論文の四分の一近くを執筆することになったのが京都大学に提出した「活性態領域におけるステンレス鋼の耐食性に関する研究」という論文である。平の新入社員が常務と直接話す機会などあまり無い時代であり水野さんの人柄に惚れ込んだ。

水野さんが取締役として川崎工場長になったのは戦時中の一九四三年、常務取締役就任は戦後の一九五〇年である。

論文の手伝いを始めた頃、水野さんが幕府御三家の紀州藩の付家老で三万五千石の新宮水野家の直系の殿様だという話を聞いた。戦前のことだと思うが、工場には乗馬で通勤していたという。

取締役就任以前の経歴は良くわからないが、大正期の紳士録をしつこく調べたところ、鴻池銀行東京支配人芦田順三郎の養子となった水野忠武（水野忠幹の七男）とふみの間の長男として生まれていることが判明した。生年月日（一九一〇年）から推定すると、京都大学の卒業は一九三三年頃で、卒業以前に陸軍少尉に任官

し、そのまま卒業したとの伝承と繋がる。おそらく軍人を志向したのは、一九〇二年一月「八甲田山彷徨」で亡くなった伯父の水野忠宣（死亡時陸軍中尉二十六歳）の後を継いだのではなからうか。この件は後に述べる。

歴代新宮水野家が付家老を務めた紀州藩は、徳川御三家の中でも八代將軍吉宗や十四代將軍家茂を宗家に輩出した最も成功を収めた家柄である。しかも吉宗が御三卿体制を敷いたことで、その後の將軍職を紀州藩系列で独占し宗家を凌ぐほどの隆盛を誇っていた。

その付家老である新宮水野家は石高こそ三万五千石の陪臣であるが、幕末には大老井伊直弼と組み、幼少の紀州藩主徳川善福を擁立して十四代將軍家茂として宗家に送り込むことに成功している。

その経過については、今では新宮観光協会の『新宮藩主水野忠央』(1)や和歌山県観光振興課の『わかやま歴史物語85水野忠央』(2)などにかなり詳しく載っている。ただ、筆者は三十五年程前に既に引退して二十年近くになる水野さんのお宅を訪問した際に頂戴した『新宮水野家御供養記念』(3)と言う小冊子を持っている。新宮水野家の十四代に相当する水野誠さんが新宮水野家の十二代重吉公五十回忌と十三代忠武公三十三回忌に際して纏めたものである。その中に「水野忠央と丹鶴書院」という千六百字ほどの紹介記事がある。

幕末政治史上における忠央の活躍については、今更言うまでも無いが、政敵の立場にあつた吉田松陰の言葉を次のように記している。

関東に二奸あり、曰く閣老堀田備中守、曰く紀州附家老水野土佐守……水野は奸にして才あり、世頗る之を畏る、その丹鶴叢書を輯めて以て国学者を欺き、銃陣を練り、製薬局を開き、測量器を備え、以て洋学者を収む、又蝦夷を開墾して以て雄略を視す、亦一世え豪なり（幽室文橋）。

これらのことを『わかやま歴史物語』(2)では簡潔に次のように記す。

江戸後期、紀州藩付家老で新宮城九代当主水野忠央は、紀州藩の江戸詰め付け家老であり、將軍継嗣問題にも深く関与するなど実力者として中央でも辣腕を發揮。紀州藩内では十代藩主・徳川治宝の死後、跡を継いだ当時まだ四歳の藩主・徳川慶福の補佐役として藩内の実権を掌握。

その後、慶福を十三代將軍・徳川家定の跡継ぎとして擁立し、大老・井伊直弼や大奥と手を結び、十四代將軍・徳川家茂とすることに成功した。その實力は政治面だけでなく、洋式砲術や造船、操船術などを研究、他藩に先駆けて西洋式軍隊の編成に改め騎馬式訓練（丹鶴流）を採用するなど、武の面でも時流を捉えた先見性を發揮。

さらに、早くから蘭語や英語、仏語などの原書を多く翻訳させ、文化人としても優れた才覚を見せた。一方、学問や學術に造詣が深く、歴史、文学、医学などの古典籍をまとめた書物『丹鶴叢書』を編纂・刊行したことで、江戸三大国書の一つとして高く評価されている。

紀伊新宮藩のお膝元である新宮市には、「新宮（丹鶴）城跡」をはじめとした史跡が残り、紀州藩の家老でありながら、幕末の政治に影響を与えた水野忠央の息づかいを感じる事ができる。

また、新宮観光協会の『新宮藩主水野忠央』(1)は非常に詳細な内容を記していて、『わかやま歴史物語』を補足する内容もあり拔萃すると次のとおり。

忠央には八人の妹がいたが、……そのうちのお広という妹を大奥に送り込んだ。これがのちのお琴の方だ。彼女は十二代將軍家慶のお手つきとなり、鐐姫、田鶴若、鋪姫、長吉郎を産んだ。（田鶴若は一八四五年生まれで忠央は紀州藩の十三代藩主への擁立を画策するが翌年死亡し沙汰済み。また一八五三年に就任した十三代將軍家定には忠央の姉の睦（ちか）を側室に送り込む）  
当時、大奥に子女を入れることができるのは、一万石以下の旗本の娘に限るといふしきたりがあったが、

忠央は敢えてその掟を破った。さらにお琴の方の妹を御納戸頭取平岡丹波守道弘に嫁がせ、次の妹も中奥御小姓衆の新見豊前守正興の正室にするなどして將軍の側近を身内で固め、將軍家茂実現に大きな力となった。

忠央のそうした大奥工作を財政面から支えたのが、熊野三山貸付と富籤でふくれあがった潤沢な資金と良質の熊野炭だった。ことに新宮産の炭は評判がよく、大消費地の江戸に海路を使って年間十万俵も送られ、江戸の炭相場を左右した。……他藩の船と違って葵の旗をたてた御手船は入船銀免除、……ノータックスで通した。また海を越えて運ばれた熊野材は、江戸の木材需要の三割をまかしたといわれる。忠央はこの新宮炭を幕閣要路に付け届けとして配り……積極的に大奥工作を進めて、彦根藩の井伊直弼を大老にすることに成功した。

……特に有名なのは丹鶴叢書の編纂だ。……その数、百七十一巻。水戸の『大日本史』、塙保己一の『群書類従』とともに徳川時代の三大名著といわれる。紀州藩の実権を握った忠央は、新知識吸収の成果を試すべく本藩の兵制を一変させた。……和歌山湊御殿の馬場では実戦そのままの騎馬調練を行ない、……忠央自身も馬術の達人で、……洋鞍を用いるその洋式馬術は丹鶴流といわれ、……丹鶴城の二の丸

には常時五百挺の鉄砲を備えていた。

ペリーの艦隊がやってきて以来、幕府は……大船建造の禁令を撤回し……新宮藩では、早くもその六年後に本格的な洋式帆船丹鶴丸を建造した。……この丹鶴丸は、船の全長が水際で十三間半あったという。……後にこの丹鶴丸は、イギリスのモリソン号から錨を買い、浦賀にまわして軍艦に仕立て、その後、松山の松平隠岐守に三千両（五千五百両とも）で売却したという。

……老中への宿望が着々と実現しかけていたまさにそのときに、頼みの大老・井伊直弼は、桜田門外で水戸浪士に暗殺され、忠央の運命も暗転する。

大老暗殺のあと、忠央は幕府から慎（隠居慎み）の処分を受け、歴代の新宮藩主として初めて領地の新宮に隠遁せざるをえなくなった。その際には新宮まで騎馬で逃げ帰ったとの伝承もある。

水野忠央の伝記を書こうとしているわけではないが、幕末の新宮水野家のことは地方史として語られていて、纏まった全国ベースの文献が少ないので、つい力んでしまった。

ついでなので、新宮水野家の十一代水野忠幹の世子で「八甲田山彷徨」で凍死した陸軍中尉水野忠宜のことも

述べておこう。

新田次郎の『八甲田山死の彷徨』には名前も出ていないが、水野忠宜は水野誠さんの伯父に当たる。遭難の詳細は伊藤薫の『八甲田山・消された真実』に詳しい。

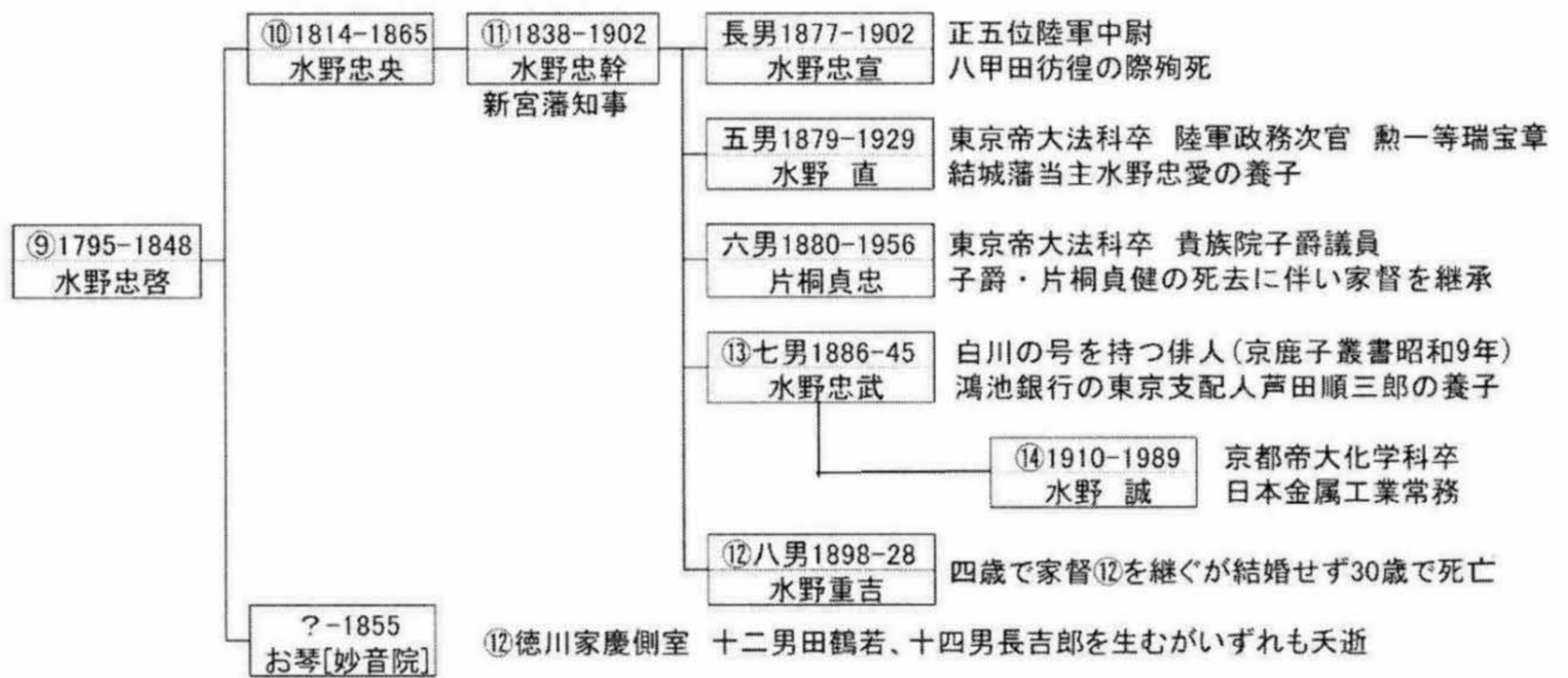
全員凍死する水野忠宣中尉が率いた臨時編成の青森歩兵第五連隊、第四小隊四十三名は第八中隊からの選抜であつた。中尉が小隊を率いたのは中隊からの選抜編成による。

落伍者が出始める。

かくする内に水野子爵の子息水野少尉(ママ)が、歩行困難になって何も言わずにそのまま斃れた。平生登山などをして鍛錬していたのが将校中で一番早く死亡した華族の水野中尉だったので、……伊藤中尉の意見具申も聞き入れなかつた山口少佐も流石に効いたよう露営することにした。

水野中尉の遺体を検分したのは水野忠幹の五男で後に旧結城藩の水野忠愛の養子になる弟の水野直である。養父は旧結城藩当主家の水野忠愛、直は東京帝大法科出身で陸軍省次官を務める。

さて、この辺で水野家の系図を紹介しようと思うが、大名家の系図が如何に複雑か痛感している。例えば井伊家十六代の直弼は十四代直中、十五代直亮の後に直列に繋がっているようにみえるが、十五代直亮は直中の三男、



直亮の後の直弼は直中の十四男なのである。しかも直弼は直亮の養子となつていて、直亮(なおあき)は直弼(なおすけ)とも読むので二代同音なのである。

それにしても直中の十四男が井伊藩当主になるのは極めて異例であつた。子福者の直中は長男・次男が病弱であつたので三男直亮を後継者にしたが、今度は直亮に子がなく、直亮は直中の十一男直元を養子に迎える。しかも直元も藩主襲名の前に亡くなり、部屋住みの直弼を急遽世子に指名したのである。

井伊家が譜代筆頭で、世子以外の男子をほとんど、養子に出してしまっていたので、直弼は父の隠居後に妾腹から生まれた庶子の十四男なので養子先もなく、三百俵という中級藩士なみの待遇で十七歳から三十二歳までひっそりと生きていた。それが三十六歳で藩主、ペリー来航時には三十九歳で幕閣に参与している。

新宮水野家も十代忠央から水野誠さんの十四代までの系図は複雑である。十代藩主忠央の長子が十一代藩主の忠幹であるが、忠幹の世子忠宣が八甲田山で殉じたことで次の十二代の座が妾腹で八男、四才の重吉に回っていく。井伊家と同じく、立派な世子として忠宣がいたので、七男まではみんな養子に出ている、四歳の重吉だけが残っていた。

十一代藩主の忠幹は、策謀家であった父とは違って謹厳実直であり、度量も広かったため、人望があったという。忠央失脚のあと、第二次長州戦争の際には幕軍の先鋒をつとめ弱体であった幕軍にあって長州に勝利し「鬼水野」と言われた。また鳥羽・伏見の戦いのあと、幕軍の残存兵を匿ったため、新政府から賊軍と見なされたが忠幹の弁明で藩は存続し新宮藩知事、新宮県知事を務めている。しかしその後は熊野炭や熊野木材の權益に頼って事業を開始したが武士の商法で資産を失った。成人した息子たちを養子に出したのもそんな関係であったであ

ろう。

男爵を継いだ八男重吉は病弱であったらしく、学歴も不明であり、結婚もせず一九二六年に亡くなる。そのため既に鴻池銀行の東京支配人芦田順三郎の養子となっていた七男の忠武を十三代として戻す。

忠武は白川の号を持つアララギ派の俳人で一四七頁、二六八首を収録した『丹鶴集』（京鹿子叢書）という句集を一九三四年に出している。異例ではあるが、「京鹿子」を主催するの序に加え数歳年下ではあるが、「京鹿子」を主催する鈴鹿野風呂の序と一回り年下で昭和俳句の旗手といわれた日野草城の序も載っている。二人とも京都帝大出身であり水野白川も京都帝大の出身と思われるが未だ確認出来ていない。日野草城の句集は春夏秋冬で分類しているが水野白川も同じ方式を採っている。また水野忠武は一九三二年に『光琳派名畫集』を自家出版している。その後、四版ほど複製版が出ているが、水野原版は古本で一万円を超す。

また

水野白川（忠武）が水野誠さんの御尊父であるが、当時の住まいを京都府左京区岡崎法勝寺町の白川荘としており、おそらく芦田家との養子縁組を解消した一九二六年頃には京都に本拠地を移したらしい。京都白川通り沿いで京都大学とも近く、哲学の道なども散策していたことであろう。



また、目的は定かでないが、日米開戦の直前に三ヶ月間渡米して帰国した人物。政界絡みもあつたのであろうか。

こうやって水野誠さんの一族を調べてみると、水野誠さんの伯父さん達、すなわち水野忠幹の子供たちは、長男水野忠宣、五男水野直、六男片桐貞忠はいずれも当時の最高学府の教育を受けたエリートであり、七男で実父の水野忠武もおそらく京都帝大出身の「文化人」で、錚々たる経歴の一家であつた。

おそらく一九六六年のことであつたと思う。入社六年目で川崎工場技術課技術係長になつたばかりだつた。水野さんが米国GEの原子力関係の技術者二、三名の他、商社の通訳等を通して川崎工場にやってきた。東京電力が福島原子力発電所に最初の原子力発電装置、沸騰水型軽水炉(BWR-3)GE原子炉の一号機の正式発注を決めた頃であつた。

原子炉には軽水炉と重水炉があるが日本ではほとんど全て熱中性子の減速に純水を用いる軽水炉を用いている。軽水炉に限つたことではないが、原子力発電所の構造機体にはステンレス鋼が非常に多く用いられている。そのステンレス鋼が万一腐食したら大事故になる。

ステンレス鋼が純水環境で腐食するはずがない。そう思うのがいわば「一般常識」であつたらうが、実はステ

ンレス鋼には応力腐食割れという奇妙な現象があり、構成部品に残留応力があり純水中に微量な塩素イオンが存在するとひび割れを起こすことはステンレス鋼関係者なら良く知っていた。そのため、当時、日本のステンレス鋼腐食について権威者のひとりであつた水野誠さんが、GEの技術者と意見交換していたことは疑い無い。その水野さんが川崎工場にGEの技術者を連れてきた。

しかし日本のステンレス鋼関係者が原子力発電所におけるステンレス鋼の応力腐食割れについて熟知しているはずがない。いわば教育の一環であつたのであろう。工場の技術者が二十名ほど会議室に集められる。

なにしろ日本における原子力発電所の最初の事例である。衆知のように二〇一一年の東北大震災でまさにその炉がメルトダウンを起こしたのである。

当初、GEはこの一号機は米国において既に技術的に完成しているとの見解をもつて日本に対してきた。しかし、厳密に言えば完成途上であつた。その過程で日本の協力は不可欠であつた。

まだ建設も始まつていない状況だったので、工場の技術者に対する講演が主目的であつた。講演は商社の技術者の通訳で行われたように記憶している。

吃驚したのは、講演後の質疑でやや小声ながら水野さんが流暢な英語でGEの技術者と討論を始めたのである。全く予想もしていなかつたことなので、ショックを受け

た。

高校、大学、そして入社以降も英語特に英会話を敵性語として敵視して過ごしていた。そんな偏狭なことでは人生が狭くなる。

そして週二回仕事が終わってから帰宅途中、五反田にある英会話教室に通い始めたのである。寄り道になるので三十分ほど余計に時間がかかるが、それも自分が怠惰であることを承知していたので、全て個人レッスン、費用も掛かるがなによりも休むと先生に迷惑となる。

そこで米軍軍人上がりで日本名をケン・オキヤマと名乗るスリランカ大僧正の子息に出会ったのである。どうやら日本名は母方の姓らしいが、教室では日本語をほとんど使わない。父親の大僧正の話をしばしばしていた。スリランカの大僧正というのは小乗仏教界の最高権威者であり、西欧とくにドイツではスリランカ哲学者として非常に崇拜されていたという。

英会話の授業が全てフリーカンバセーションであることも気に入った。英語が聞き取れないと言うと、単語力がないからだといって、米国の高校生が有名大学を目指すときに「単語力」をつける必修の辞書、五千語を収録した『Vocabulary Builder』を頭から覚えさせられた。

専門分野の単語が多い。筆者が勉強していた「金属学」とか「考古学」の単語も相当収録している。米国の高校生はこんな単語を勉強しているのかと感心した。

ケン・オキヤマ先生には結婚するまで師事し、結婚式にも来て頂いた。来賓席で水野誠さんと同じテーブルに座って頂いた。

水野誠さんが英会話に熟達していたのは、養父の鴻池銀行東京支配人芦田順三郎の影響であったかも知れない。それとも水野さんが敬虔なキリスト教徒であったことが関係しているのだろうか。

すでに示したように水野誠さんには『新宮水野家御供養記念』という小冊子がある。内容は①水野一族略年譜、②新宮水野家略年譜、③水野忠央公略年譜、④水野忠央と丹鶴書院となっているが冒頭に、「祝福」を載せている。

神はそのひとり子を賜ったほどに、

この世を愛して下さった。

それは

御子を信じる者がひとりも滅びないで

永遠の生命に生きるためである

ヨハネ伝三章十六節

そして続く「祈り」には

人のよわいは草の如く

その栄えは野の花に等しい。

風すぎれば、うせて跡なく

もはや、これを知るものもない。

しかし

神よ、あなたの

至高、壮大なる愛は

天の地よりも高きが如く

塵なる我らを抱かれる。

神よ、あなたの

聖なる業は

人の想いをはるかに越えて

贖罪、復活、栄化の恵みを賜う。

伏して願う

祖先の霊を我等と共に

祝したまえ

### 誠記

### 祈り、追記

私はキリスト教徒でございますので、

神の霊に導かれるままに、祝福と恩寵の祈りを記し

ました。佛式行事の中に、調和を欠きまして残念に

存知ますが御諒察、御寛容を願います。

旧約聖書から字句を引用しながらの文章。一部だけを引用するつもりであったが、水野誠さんの人柄が良く現れていると思ひ結局全文引用した。

キリスト教徒とあるだけで、宗派や教会を探してみたが判らなかつた。若き日に教会に通ひ、神父から英語を学んだとおきたい。

いずれにしてもまがりなりに英会話に気後れしなくなったのは水野誠さんのお陰である。その頃から、海外旅行に出かけた際には、他人の何倍も楽しんで「投資」を回収するのだと言っていた。事実、そうだったように思う。

娘は大学を出てから、英国で語学留学のつもりで看護施設で働いた。その娘が「お父さんて、そんなに英語が下手だったの」と言う。それが本当のところであるが、「外人さん」に、気後れすることなく、単語だけ連発する英会話をあまり恥ずかしいとは思っていない。

新宮水野家は紀州藩の付家老であり、江戸常駐の大名格の家老であった。歴代の当主や親族の多くは鎌倉高松寺に葬られていたが、現在では旧新宮城の一部分、千坪ほどの墓地に十六基の墓石が並んでいる。おそらく水野誠さんと父の十三代水野忠武が移葬したのであろう。墓地はすでに新宮市の管理にある。水野さんからは墓地の税金等は免除されているとうかがっているが、十四代の水野誠さんも同所に葬られているのであろうか。

### 脚注

(1)新宮市観光協会ホームページ：<http://www.shinguu.jp/shinguu-modern-file06> 新宮モダン06「新宮藩主

水野忠央」から四分の一ほど引用

(2) 和歌山県観光振興課ホームページ：<http://wakayama-rekishi100.jp/story/085.html>「吉田松陰も恐れた！幕末の開明家・国学者 水野忠央」より。

(3) 水野誠『新宮水野家御供養記念』私家版、一九七七。